生涯学習
No.506
かおり高い文化のまち

力いっぱい引っぱったおん柱

下諏訪南小四年　熊谷　太輝

四月十日に、お母さんと妹と3人で下社の山出しに行きました。そして、秋宮一のおん柱を引っぱりました。さいしょに小づなを元づなにしめて出発をまちました。その後、木やりほぞん会のみなさんが木やりうたをないたら、力いっぱい引っぱりました。みんなに負けないぐらい、「ヨイサ、ヨイサ。」といいながら力いっぱい引っぱりました。

大曲がりでは、大人の人が元づなを押してくれました。大曲がりでぎゅうぎゅうづめで、ちょっとだけいたかったです。大曲がりの所を、大人たちが押していてすごいなと思いました。

ぼくはおん柱を引っぱって、大曲がりの所を力いっぱい引っぱれたし、あきらめずに引っぱれてよかったです。

五月の里びきもがんばって引っぱりたいです。

初めて鳴いたおん柱の木やり

下諏訪北小五年　林　実緒

わたしは、保育園の年中のころから木やりをやっています。今回は、おん柱で初めて木やりを鳴きました。

もんくや節まわしを間ちがえないように気を付けていたので、とてもきんちょうしました。きんちょうしすぎて、山出しの二日間のことは、実はよくおぼえていません。

それに柱と一しょに歩くので、つかれました。でも、木やりを鳴くと、柱も動くし、他の人にもほめられてうれしかったです。

千二百年も続いてきた伝とう行事なので、これからも受けついでいきたいと思います。

■諏訪湖博物館の７月の休館日は、４・11・19・25日です。

発行　下諏訪町教育委員会
編集　生涯学習
編集委員会

〒393-8501
長野県諏訪郡下諏訪町4611-40
(下諏訪総合文化センター内)
☎ 0266-27-1111(内線718)
FAX 0266-28-0131
E-mail=syougai@town.shimosuwa.lg.jp

近くで参加した御柱祭

高校一年　依田　龍政

御柱祭に参加するのは、自分にとって2度目のことだった。1度目は氏子として御柱を引いた。そして今回は、町内旗の旗持ちという役に就かせていただいた。

旗持ちは御柱の先頭で旗を持って歩くのが仕事だが、柱からはかなり離れている。引き綱には大勢の氏子がいるので、振り返っても柱を見ることはできない。

木遣りの合図で氏子が引き始めたら自分も歩く。町内会の人たちと交代しながら、秋宮一の山出し初日を終えた。曳行中は御柱の姿を見ることができなかったにも関わらず、ぼくは御柱祭により近くで参加できたと感じた。

前回経験した御柱を引くのも大きな仕事で、祭り自体に深く関わるものだ。しかし、旗持ちは引き手に比べて圧倒的に数が少ない。それだけ重要なことなのだと思う。旗持ちを行うことで、前回よりもとても近くで御柱祭に参加できたと感じている。

この体験を通して、諏訪の御柱祭に対して、今までよりも深い興味を持つことができた。

御柱祭を通して

高校二年　今井　彩咲子（あさこ）

今回の御柱祭では、花笠踊りや旗持ちなど、たくさんのことをさせていただき、忙しいながらも充実した三日間を過ごすことができました。

まず印象に残っているのは、木落し坂を下った時のことです。最初は、高くて怖いと感じていたけれど、下りながら見た景色は最高で、楽しい時間になりました。一歩踏み出すのが怖かったけど、挑戦してみると案外何ともないことだった…というのはよくあることだと思います。この機会を通して、私は、勇気を出して様々な挑戦をしていこうと思えました。

次に感じたのが、御柱が繋がりを作っているということです。御柱がなければ来ることのなかった場所、出会うことのなかった人…。御柱は人と人、町と町を繋げる架け橋となるお祭りだと、改めて感じました。そんな素敵なお祭りがある町に生まれて本当に幸せです。

六年後、またここで会いましょう！

■下諏訪総合文化センターの７月の休館日は、５・12・19・26日です。

御柱にかけるわたしの思い

東高木　高木　秀貴

平成二十八年、丙申（ひのえさる）年、今年の御柱は私にとって四度目となり、前回までとは変わって、特別な思いがある。

今回の役目は、五区元綱長、秋三山出しでは、副綱長としての仕事となる。その活動と志を語る前に、私が御柱に携わることになった経緯に触れてみたい。

高校を卒業してしばらくたった平成十年、何気なく木落しを見学に行く。ちょうど春三せり出しの場面、三十代位の華乗りと思われる人が、ユラユラ揺れる柱の上を立って乗りこなし、堂々とした挨拶をした。その雄叫びとも思える掛け声に、群衆は熱気と歓声を送る。

地響きのような音、「いや、これは声のうなりだ！」私は、サッカー少年がメッシやロナウドでも見たかのような、まるで背中に落雷でも受けたような感覚を覚えた。「これをやらずに生きておれるか！」その日の内に決意を固め、村内の祭事に関して特別な役割のある方々に相談に向かうこととなる。同年平成十年の木落しでは五番手に乗ることができ、その後平成十六年の三番手を経て、前回華乗りを務めさせていただいた。

ここまでの経緯で是非とも言いたい大切なことがある。若い私を土地に生きる人間として指導して下さった方、必要技能・知識を教え、実戦経験へと送り出して下さった方、祭りとは何かを真剣に考える機会を与えて下さった方、木落しの乗り手という特別な役に導き、その席を設けてくださった方、それらの方々がいたからこそなせたということだ。

今回の山出しの活動では、そうした指導者のことを常に思い出しながら、その道筋をたどり、背中を追うことにした。

年が明け、元綱係として練習・準備を何度も重ね、仲間と試行錯誤を繰り返す。仕事は結果がすべてであり、現場では安全性と確実性が求められる。それゆえに皆で真に迫った練習を行う。打合せ・会合を何度となく行い、大祭に向けて皆で結束を固めていった。

その中で指導者にありがちな孤独と重圧も、仲間たちの真摯な姿で無に帰し、組織の柱となる連帯感も生まれ、感謝の思いに包まれた。

御柱は間違ってもイベントではない。特に山出しは神事としての性格が強く、難所と呼ばれる曲がり道や急坂は命に関わることもしばしばで、氏子にも観客にも大いに楽しんでもらう為に的確な仕事をなす。これには知識と心の準備は怠れない。

まだ祭りも半ば、心身共に熱して鍛え込み、次の里曳きを迎えたい。

地区の仲間たちとともに

■下諏訪立図書館の７月の休館日は、１・４・11・19・25日です。

綱打ちは御柱祭の前奏曲 地域の団結力

御田町　小口　恭一

私が綱打ち委員長として一月末に任命され、第一回委員会で、各担当係の人員配置をしたところ、約八十軒の半数以上の家庭が高齢者家庭であり、作業員不足が強く感じられました。外部からの参加者も募ってみてはどうかとの声が上がり、高齢者でも、子どもでも、女性でも参加でき、御田町は外部の人を温かく迎える町であることをアピールし、広報を通してご協力をお願いしたところ、「大和電機ソフトボール部」の方々が、協力していただけることになりました。今後もそれぞれの町で人員不足が表れると思いますが、町、区、町内会が連携を取りながら、より良い方向を見いだすべきだと思っております。

みんなで力を合わせて

さて、綱打ち当日の二月二十八日は快晴となり、午前六時に各係が神事の場所である信金御田町支店前の駐車場に集まりました。武藤工業前の町道には、荒縄百三十五玉が積み上げられ、トラックには綱打ち機械がセットされました。

午前八時に神事も終わり、木遣り一声、綱打ちが始まりました。

大和電機の皆さんの内、三名の方には、御田町おかみさん会と交流のある花田養護学校中等部の作成したゆるキャラ、「ミータマちゃん」のぬいぐるみに入っていただき、会場を盛り上げてもらいました。残りの皆さんには、ソフトボールで鍛えた強い手首の力で綱を巻いてもらい、各家庭から出てこられた高齢者、子ども、女性も隙間なく綱について、一生懸命に整備してくださる姿に感激しました。

午前中に細い小宮用綱一本、太い山出し用綱一本が仕上がり、昼食となりました。会場の平和館広間では、全員は一遍には入りきらず、二回に分けるなど、「こんなに御田町にも人がいたんだ。」と改めて感じました。

午後に太い里曳き用綱一本を仕上げ、房を付け化粧して、三ヶ所に展示するべく、町内の建設業のユニック車をお借りして、納め飾らせていただきました。

午後四時からご苦労会を行い、多くの方々に参加していただきました。食べ、飲み、木遣りも出て、会場は大いに盛り上がり、御柱祭本番に向け山出し、里曳きの話に花が咲きました。

今回の綱打ちには、立町町内会より機械・道具一式をお借りした他、町内業者の方より機材一式をお借りしました。ありがたく、感謝しております。

諏訪人の心の節目に七年という単位があり、『次の御柱祭までになにかをしよう』『私は後何回の御柱祭を見られるだろうか』と言われます。地域に密着した御柱祭には、地域を結びつける力があります。その前奏曲が綱打ちです。さあ御柱祭はがんばるぞ！楽しみだ！

ミータマちゃんも一緒に

■ 下諏訪体育館の７月の休館日は、５・12・19・20・26日です。

しもすわ人形劇まつり　2016

日　時：**7月2日（土）　午後1時30分～午後4時30分**
　　7月3日（日）　午前10時00分～午後1時00分
会　場：**下諏訪総合文化センター　小ホール　ほか**

入場料：**高校生以上　500円（2日間有効）**
　　中学生以下　無料
★チケットは、下諏訪総合文化センター窓口で販売中。
＜問合せ先＞　**下諏訪総合文化センター　28-0018**

自然観察会　～ガイドと歩く夏の八島湿原～

1万2千年前に誕生し、静かに成長を続ける八島湿原、標高約1,632mの高層湿原で1年に1㎜ずつ堆積をする泥炭層の厚さは8mに達します。日本最南の湿原で、八島湿原の周辺ではヤナギランやアザミの仲間など華やかな花に出会うことができます。このような貴重な湿原を、ガイドの説明を聞きながら歩いてみませんか。

開催日は、「信州山の日」（7月の第4日曜日）です。

日　時：7月24日（日）　午前8時～午後2時ごろ
　　※午前7時50分、総合文化センター前集合（貸切バスで移動）
定　員：80名
コース：八島駐車場～八島湿原一周～八島駐車場（予定）
　　※昼食は各自でご用意をお願いします。(食事処を利用することもできます)
内　容：自然観察ガイドの説明を聞きながら、八島湿原周辺を歩きます。雨水や霧を利用して育つ高層湿原特有の植物を観察して歩くのも楽しみです。
　　家族や友人、恋人同士で、夏の爽やかな高原を満喫しませんか。
参加費：500円（保険料・資料代）
申込み：参加費を添えて、**7月15日（金）まで**に直接下記窓口へお越しください。
問合せ：下諏訪町教育委員会／生涯学習係（文化センター内）27－1111（内線718）
　　下諏訪町産業振興課／商工観光係（町庁舎2階）　27－1111（内線272）
　　下諏訪観光協会（儀象堂内）　26－2102
　　※詳しい内容については、班回覧のチラシをご覧ください

町立図書館のおすすめ本コーナー

「戦争は女の顔をしていない」

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ著　岩波書店

ノーベル賞受賞作家のデビュー作です。表紙のタイトル横に一枚の写真。まだあどけない五人の美少女たちだが、全員軍服を着用している。昨日まではワンピースやハイヒール姿にあこがれていたであろう少女たちが、自慢のお下げ髪をばっさり切って・・・微笑んでいる少女もいるが、物憂いような表情の奥に固い決意を秘めている視線。第二次大戦のソ連では百万人の女性たちが実戦に臨み、多くが戦病死した。生き残っても「戦争に行った女」と烙印を押され差別された。彼女たちの声を丹念に聞き取った労作である。

（書評ボランティア　　植松　昌広）

町民大学　―下諏訪を学ぶ②―

演　題：**「下諏訪の文学 ＜九＞　下諏訪の昔話**
～御柱祭を題材とした文学と諏訪信仰～」

講　師：**小口　明　　元下諏訪町教育長　島木赤彦研究会員**

日　時：**７月24日（日）　午後１時30分～午後３時00分**

会　場：**文化センター集会室　　※当日受付可（受講料100円）**

御柱祭の年になると、必ず御柱祭を題材として詠んだ短歌、描かれた小説などが話題となります。しかし、多くの作品の中に、奇祭として民俗的なものは描かれていても、諏訪信仰につながる描写はほとんどありません。何故でしょう。明治から昭和時代発表の具体的作品を紹介しながら考え、さらに諏訪信仰に触れた古典の中からも、その理由を探してみたいと思います。（講師コメント）

お問い合わせ☎28-0002（生涯学習係）

七月のこえ

小学校六年生の時の御柱祭は、今でも印象に残っている。戦後のベビーブームもあり、地域はいつも元気に遊ぶ子どもたちであふれていた。

あの年の里曳きは親に連れられ見に行った。人、人であふれる雑踏の中、長持ちの行列が続く。担ぎ手のしなやかな仕草に合わせて、豪快に上下左右に躍動するおかめや旗に御幣。「ギーコ、ギーコ」と小気味よい棹のきしみ音が、人いきれの中に見え隠れし、少年の心をゆさぶった。

六年生は近所ではガキ大将。家にあった堅炭の箱と庭木の枝を切って、長持ち作りに挑戦した。悪戦苦闘して作った長持ちを初めて担ぐときの感動は今でも忘れられない。特に苦戦したのは、あの木のこすれるきしみ音をどう出すかということであった。箱の中に大きな石を入れ、何とか音を出すことに成功するも、箱の中の石がゴロゴロと転がり安定しない。試行錯誤の末にやっと完成したときは、炭の粉で手も顔も真っ黒。それでも代わる代わる十数人の子どもたちは、聞き慣れた長持唄を大声で歌いながら、夕方遅くまで近所を練り歩いた。

七年目ごとに巡り来る諏訪御柱。年々の思い出を心に刻み、次回のよき出会いにつなげたい。

（小沢　貞義）